妊娠期・産後における母親の子どもへの愛着と子どもの気質および母親の愛着スタイルとの関連

溝 口 美 鈴

1．問題と目的

【母子の愛着の重要性】子どもにとって，最初の人間関係は母親との間で築かれる。Bowlby（1951，1969）の愛着理論によると，発達初期において母親との間に形成される愛着関係が，子どもの健全な発達に最も重要な要素であるとされている。子どもが母親との間に築くこの初期の愛着関係の重要性が，今日までの研究により指摘されてきた。例えば，乳児期に母親との間に安定した愛着を持つことが，幼児期の対人面や知的面における関心や能力の高さにつながること（Ainsworth ら，1978，Waters ら，1979，Jacobson ら，1986），幼児期，児童期の友人関係の良さに関連していること（Pastor，1981，Grossmann ら，1991）が指摘されている。さらに青年期以降に関しても，対人関係や社会適応に過去の愛着の質が関連しているとの報告がなされている（Main ら，1985，Holmes，1993）。以上より，乳児期に母親との間に形成される初期の愛着関係は，子どもの対人関係，社会性，能力，発達など様々な面で生涯にわたり重要な意味を持つと言える。

【母親から子どもへの愛着】母子関係に関しては多くの様々な研究がなされている。しかし，その大半は母子関係における子ども側に注目した研究であり，母親は影響を及ぼす要因として取り上げられることが多く，母親自身に注目した研究はほとんどなされてこなかった（Collins ら，2000；柏木，1998など）。母子の愛着に関しても，乳幼児から母親への愛着に関しては多くの研究がなされているのに対し（大日向，1988），母親の子どもへの愛着に関しては，その発達過程について近年までほとんど注目されることはなかった。しかし，母親との愛着関係は，母子の交互作用を通して築かれていくものであり，母親の子どもへの愛着発達も同様に重要であると考えられる。

【母親から胎児への愛着】ここまで母親の乳児への愛着について述べてきたが，子どもへの愛着は，出産後からはじめて始まるものではない。なぜなら，妊婦は妊娠初期から胎児に対して様々な感情を持つと考えられ，出産前から胎児への愛着は存在すると言えるからである。これまでの母子の愛着に関する研究では，産後の愛着を扱ったものが多く，妊娠期の愛着を検討した研究は Cranley の研究（1981）や Muller の研究など（1992），極端に少なく，一致した見解が得られていないのが現状と思われる。さらに，妊娠初期から産後までの母親の子どもへの愛着を継続的に検討した研究は，ほとんどなされていない。

【母親の子どもへの愛着に関連する子ども側の要因】母親側の要因が母親によって様々であるように，現代では，乳児も個々に生得的な気質を持っており，それが母親の行動や反応をある程度規定し，また精神的健康にも影響を与えると考えられるようになっている。母親と乳児の関係は，母親，乳児どちらかのみの要因によってではなく，母子双方の要因，その交互作用によって成立すると言える。そこで本研究では，子ども側の要因として気質を取り上げる。子どもの気質と母親側の要因について検討した研究には，母親の抑うつや育児ストレスとの関連を扱ったものが多く（Wokind, & De Salis, 1982，水野，1998，菅原ら，1999）母親の愛着と子どもの気質との関連を検討した研究は見当たらない。さらに妊娠期からの母親の愛着と子どもの気質との関連について検討した研究はなされていない。

【本研究の目的】以上より，本研究では妊娠期から産後における母親の子どもへの愛着の関連を明らかにするとともに，それらの愛着が子どもの気質にどのように関連しているのかを検討することを目的とする。またどのような要因が母親の愛着の高さに関連しているのかについても検討する。

2．研究 I

【問題と目的】妊娠初期，妊娠後期，さらに産後における母親の子どもへの愛着の関連，愛着と子どもの気質との関連を検討することを目的とする。さらにデモグラフィック要因が，子どもへの愛着にもたらす差異についても検討する。

【方法】1998年９月から2003年12月にＮ病院産科を受診した妊娠初期の妊婦483人に対し，妊娠初期から中期（３～５ヶ月），妊娠後期（８ヶ月），産後１ヶ月の３回にわたって質問紙調査を行った。継続的に協力を得られた妊娠後期321人，産後１ヶ月140人。

＜妊娠初期から中期の質問紙＞妊娠中期母親胎児愛着尺度（Honjo, in press），デモグラフィック要因（年齢，妊娠月齢，リスクの有無，仕事の形態，出産経験の有無，

流産経験の有無，不妊治療の有無，つわりの程度，妊娠予定の有無），サポートの有無。

＜妊娠後期の質問紙＞Maternal-Fetal Attachment Scale（Cranley, 1981）

＜産後１ヶ月の質問紙＞産褥期母親愛着尺度（Nagata ら，2000），Early Infant Temperament Questionnaire（EITQ：Medoff-Cooper, Carey, & McDevitt, 1990）の日本語版（Honjo 訳），デモグラフィック要因（自身の体調，子の体調，仕事，同居家族），サポートの程度。

３．研究Ⅱ

【問題と目的】研究Ⅰでは，母親の愛着が妊娠期から産後を通して継続的な関連があることが分かった。また，妊娠期の胎児への愛着は子どもの気質とは関連がなく，産後の子どもへの愛着が子どもの気質と関連していることが明らかになった。そこで研究Ⅱでは，産褥期，産後１ヶ月，産後６ヶ月における母親の子どもに対する愛着を同一の尺度を用いて測定し，子どもの気質が愛着の時期による変化にもたらす差異について検討する。

【方法】妊娠期にＮ病院産科を受診し，1999年１月から2003年11月に出産した女性285人に対し，産褥期，産後１ヶ月，産後６ヶ月と継続的に質問紙調査を行った。産後１ヶ月140人，産後６ヶ月131人。

＜産褥期の質問紙＞産褥期母親愛着尺度（Nagata ら，2000），デモグラフィック要因（在胎週，子どもの性別，妊娠経過，出産形態，出産状況，子どもとすでに会ったか）。

＜産後１ヶ月の質問紙＞産褥期母親愛着尺度（Nagata ら，2000），Early Infant Temperament Questionnaire（EITQ：Medoff-Cooper, Carey, & McDevitt, 1990），デモグラフィック要因（自身の体調，入院中の子どもの体調，退院後の子の体調，仕事の形態），サポートの程度。

＜産後６ヶ月質問紙＞産褥期母親愛着尺度（Nagata ら，2000），Revision of Infant Temperament Questionnaire（RITQ：Carey＆Mcdevitt,1978），デモグラフィック要因（自身の体調，子どもの体調，仕事の形態），サポートの程度。

４．研究Ⅰ，Ⅱ結果・考察

【尺度の因子構造】研究Ⅰでは，各尺度について因子分析（主因子法）を行いバリマックス回転を施した。その結果，妊娠初期，妊娠後期愛着尺度は１因子が，産後１ヶ月愛着尺度は２因子が抽出された（「中核母親愛着」因子，「子どもに関わることへの不安」因子）。回想された親への愛着尺度は３因子が（「親への Secure」，「親への Ambivalent」，「親への Avoidant」），愛着スタイル尺度は３因子（「愛着スタイルの Secure」，「愛着スタイルの Ambivalent」，「愛着スタイルの Avoidant」）が抽出された。子どもの気質に関しては，項目分析の結果７因子が採用された（規則性，接近性，順応性，気分の質，持続性，散漫性，反応閾値）。研究Ⅱについて，まず産褥期，産後６ヶ月の愛着尺度，１ヶ月の気質尺度については研究Ⅰと同一の因子構造を採用した。６ヶ月の子どもの気質に関しては，項目分析の結果８因子が採用された（活動性，規則性，接近性，適応性，反応強度，持続性，散漫性，反応閾値）。

【愛着とデモグラフィックデータとの関連】研究Ⅰ，Ⅱにおいて愛着得点のサポートによる有意差が認められた。母親が子どもへの愛着を築く上で，身近な家族からのサポート，中でも自分の両親からのサポートが大切であることが分かった。さらに，妊娠期・産後を通じて愛着の高さと関連があった妊娠初期におけるサポートが特に重要であることが示唆された。

【妊娠期から産後６ヶ月の母親の子どもへの愛着】研究Ⅰ，Ⅱより妊娠初期から産後にわたって有意な正の相関が認められたことから，愛着は継続した関連があり，妊娠期の胎児への愛着が，産後の子どもへの愛着の基礎となる可能性も示唆された。また，研究Ⅱより産後における母親の子どもへの愛着は，産褥期から産後１ヶ月，産後６ヶ月と高くなっていく傾向にあったこと，逆に子どもに関わることへの不安は，産褥期，産後１ヶ月，産後６ヶ月と低くなっていく傾向にあったことが示された。さらに子どもへの愛着が高い母親ほど子どもに関わることへの不安は低く，逆に子どもへの愛着が低い母親ほど子どもに関わることへの不安は高いという傾向は，産後において一貫した特徴であることが分かった。

【母親の愛着と子どもの気質との関連】Thomas ら（1968）の提唱した子どもの気質の「扱いにくさ」が母親の子どもに関わることへの不安の高さと，また子どもの気質の「扱いやすさ」が母親の子どもに対する愛着の高さと，それぞれ結びついている可能性が示唆されたが，当てはまらない気質もあり一概に結論づけることはできなかった。ここで，「扱いにくさ」「扱いやすさ」のどちらにも含まれない，散漫性が産褥期から産後６ヶ月までを通して，子どもへの愛着の高さ，子どもに関わることへの不安の低さと強い関連があった。子どもの気質自体の因子構造が Thomas ら（1968）の提唱した９因子構造とは異なるものとなったことが示唆されたことから考えると，９因子に基づいて判断するより，母親がどのような子どもの気質を扱いにくいまた扱いやすいと感

じるのかについて，あらためて検討することが必要と思われる。今回の研究からは，この散漫性の程度が，母親にとって扱いやすいまたは扱いにくいと感じられる一つの基準となる気質なのではないかという仮説が提示できると思われる。また，産後の母親の愛着と子ども気質との関連において，愛着と気質との有意な相関が時期を追うごとに多くなっていくことから，母親の子どもへの愛着と子どもの気質は，出産後母親と子どもの間で繰り返される交互作用を通して互いに少しずつ関連性を強めていく可能性が示唆された。

【今後の課題】愛着および気質について母親の報告だけでなく，実際に子どもの様子を観察するなど客観的なデータを取ること，今回愛着との関連が示唆された身近な家族のサポートについてより詳細な検討をすること，母親にとって扱いにくい，扱いやすいと感じられる気質について改めて検討することが今後の課題である。